

# 一步踏み込んだ歴博の活用

成田高等学校 深田 富佐夫

## はじめに

過去とはすでに過ぎ去った時間であり、当然のことながらそれを完全に再現することは不可能である。残された史料で消えた過去を明らかにしていくことが学問としての歴史であるが、歴史的事実を明らかにしていくプロセスを何らかの形で生徒に教えていくべきだと筆者は以前から考えてきた。歴史の事実は新しい発見によって常に書き換えられる可能性があり、これまで重視されてこなかった対象に新たに光が当てられるようになることもありえるからだ。歴博は日本史・考古・民俗の分野に関する研究と展示を両立する歴史博物館であり、その展示は歴史について深く考えていくきっかけとなる史料であふれている。これを有効に活用できるようにするためには、我々教師側が展示物について詳しく知り、展示の意図を汲み取っていくという、一步踏み込んだ利用が必要であると考えた。

筆者が国立歴史民俗博物館の博学連携研究員に応募した理由の一つに、博物館の個々の展示物の意図を学び、これを生徒達に有効に伝える方法を考え、それを形にしてみたいと思ったためであった。その最初の成果が、平成20年12月24日に、本校の附属中学の生徒から希望者を募って実施した「わくわくれきはく見学ツアー」である。中学生を対象にした理由は、当時筆者が中学2年生の歴史の授業を担当していたこと、中学生にも理解できるように配慮することで内容の深化が図られるのではないかと考えたこと、である。教師であれば理解していただけるものと思うが、高校生に教えるよりも中学生に教えることの方が難しい。初学者に対して興味・関心を引きつけるだけの魅力が、授業に対して求められるからである。この企画で得られた成果を高校生向けに改良すれば、より充実した博物館学習ができるのではないかと考えた。準備として博物館に何度も通いながら、中学生の興味・関心を引くものを探した。その結果、第1展示室から第3展示室まで展示されている様々な模型を対象に、時間は9:30～15:30の半日を想定して、自主的に館内の展示物を観察するワークシートを試作した。ワークシートは観察力を高めるためにスケッチを多く取り入れ、文章力をつけるために観察したことを自分でまとめるような設問を作った。さらに、直前に中学2年の学年主任の協力を得て、実際にこのワークシートを試しながら館内を回ってみた上、内容を精査してワークシートを完成させた。当日は実際に参加した生徒は4名であったため、ワークシートの中からいくつかの設問を選び、解説方式で実施した。希望者による参加ということもあり、意欲が高く、生徒たちは積極的であった。しかし、設定した時間が長すぎ、昼食後1時間で生徒たちは退屈してしまった。そこで、次年度への課題として、展示の全てを見るのではなく、年数回に分けて、特定の展示にこだわった学習を実施しようと考えた次第である。

以下は本年度の活動の成果である。

## 1. 実施学年及び教科・領域について

歴博の授業での利用については、希望者に対する課外授業の体裁をとった。本校は土曜日にも通常の授業を実施しているため、日曜日に実施することにした。それが表1である。

1回あたりの時間を2時間程度とし、月に1度のペースで年間8回開講することにした。基本的に高校2年生、3年生の希望者を対象としたが、意欲のある高校1年生や中学生の参加も受け入れることとした。その方が内容が難しくならず、参加する生徒たちにとって親しみやすいものになるのではないかと考えたためである。

各回ともテーマに基づいたワークシートを作成するため、休日に歴博に通い、メインにする展示物を探した。通い続けることで、以前には気づかなかった展示物の見所に自然と目が行くようになった。各回とも、ワークシートとともに授業計画を作成したが、次にその一部を紹介し、具体的に述べていきたい。

(表1) 日本史校外学習年間カリキュラム

日時	テーマ
4月26日(日) 10:00～	第1回「日本を変えた稲作」(第1展示室) 旧石器時代～弥生時代対象
5月31日(日) 10:00～	第2回「緻密な支配のしくみ 律令制度ってすごい」(第1展示室) 古墳時代～奈良時代対象
6月21日(日) 10:00～	第3回「鎌倉武士の生きる道」(第2展示室)
9月27日(日) 10:00～	第4回「室町時代の京都を探検しよう」(第2展示室)
10月25日(日) 10:00～	第5回「江戸時代の都市と農村」(第3展示室)
11月29日(日) 10:00～	第6回「日本はほんとに鎖国だったの？」(第3展示室)
12月20日(日) 10:00～	第7回「時代で変わる『学び』」(第5展示室)
2月7日(日) 10:00～	第8回「日本人の信仰 民俗学への招待」(第4展示室)

## 2. それぞれの学習のねらいと博物館の活用についての実践例(一部)

### 第5回「江戸時代の都市と農村」

#### ①ねらい

江戸時代になると、経済の発展とともに都市が大きくなっていった。特に江戸は全国の武士が集まり、その生活を支える商人・職人が住むようになると一大消費都市となった。江戸に生活する人々は実に多彩で、「土農工商」という区分では説明できないほど様々な職業がある。今回は「江戸図屏風」「江戸橋広小路模型」を通じて町の構造だけでなく、そこで生活する様々な人々に光を当てることで、都市としての江戸について認識を深めることが目的である。また、江戸時代の大多数である農民の生活を、屏風という絵画資

料を用いて学習することも今回の重要な目的である。

## ②使用した博物館所蔵資料

「人物士農工商」、複製「名物案内双六」

## ③準備

博物館側の事前の協力を得て、「人物士農工商」、複製「名物案内双六」を用意してもらった。「人物士農工商」には座頭や神主の他、せきぞろ、まめぞう、角兵衛獅子のように一般的に知られていない芸能者などが掲載されている。生徒の気を引きそうなので、導入に用いることにした。「名物案内双六」は江戸各地の名物が双六になっており、江戸の地名を遊びながら覚えていくのには最適なものと考えた。寺子屋「れきはく」にも常備されているため、確認がしやすい資料である。さらに江戸の全体像を把握させるため、「江戸図屏風」を取り上げることにした。屏風を使った授業については過去に多くの成果があり、今回の博学連携研究員の中でも優れた実践が行われている方があるので、メインにするのは「江戸橋広小路」の模型にし、今回は生徒達が空間的に江戸の町を把握する教材として利用することにとどめた。「江戸橋広小路」の模型には複数のタッチパネルや解説パネルが常備されていて、生徒達に自由に観察させる学習に最適である。

ここでは時間をかけて、導入で学習した様々な身分や生業を探させたり、町並みの特徴を観察させることにした。「四季農耕図屏風」は、稲作の1年間の作業を絵にしたもので、農業経験のない都市部の生徒に稲作を理解させるにはよい教材である。これを利用して江戸のような都市部とは違う、農村の生活を理解させることにした。

## ④参加生徒

高校生2名 中学生2名

## ⑤展開

	学習内容	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
導入 10分	・江戸の町を知ろう。	・「人物士農工商」見て、江戸時代の多彩な職業を学習する。 ・寺子屋「れきはく」にある「名物案内双六」で遊びながら、江戸の地名を学習する。	・宗教者や芸能者など、「士農工商」という枠では分からない職業を紹介する。 ・現代の東京の地図を用意し、双六で遊びながら歴史的な地名と結びつくように指導する。
展開 90分	①「江戸図屏風」を鑑賞する。	・「江戸図屏風」を見て、江戸の町の景観を把握する。	・「江戸城」や「増上寺」・「神田明神」・「湯島天神」・「寛永寺」・「日本橋」など、ランドマークになる建物を確認させる。 ・浅草、板橋、品川などの地名を確認させるとともに、「五輪町」や「水道橋」などの地名の由来となる構造物を確認させる。 ・屏風に描かれている季節、催し物に注目させる。

展開 90分	②「江戸橋広小路」の模型を見る。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・タッチパネル「江戸橋広小路」を利用し、様々な職業者や建物を確認する。</li> <li>・タッチパネル「日本橋の町を掘る」を利用し、町屋の詳細を学習する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・屏風の中の人物、動物に注目させる。</li> <li>・そば屋やすし屋の路上の商人、虚無僧や願人坊主などの宗教者、非人のような被差別者を確認させる。</li> <li>・火の見やぐら、高札場、木戸、裏店など、町によく見られる建物を確認させる。</li> <li>・上水道や下水道などに注目させる。</li> <li>・四季に合わせた稲作の作業に注目させる。</li> <li>・使用される農具に注目させる。</li> </ul>
	③「四季農耕図屏風」を見る。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・農村での一年の営みを学習する。</li> </ul>	
まとめ 20分		・本日の内容を振り返る	

### ワークシートの設問

- ①江戸時代にはどのような職業があったのだろうか、説明を聞きながら書きとめておきましょう。
- ②「江戸図屏風」を見て、次の寺社や地名を確認したらチェックしましょう。
  - 江戸城 増上寺 神田明神 湯島天神 不忍池 寛永寺 山王権現
  - 愛宕山 溜池 日本橋 目黒 品川 浅草 板橋
- ③「江戸図屏風」にはどんな人物・動物がいますか書き出してみよう。
- ④「江戸橋広小路」の模型をみて、町にはどんなものがありますか。書き出してみよう。
- ⑤「四季農耕図屏風」を参考に、農村の一年間のサイクルをまとめてみよう。

## 第6回「日本はほんとに鎖国だったの？」

### ①ねらい

ドイツ人医師ケンペルが著した『日本誌』の中で、日本は長崎を通してオランダとのみ交渉を持ち閉ざされた状態であることを指摘し、その一部を志筑忠雄が和訳して「鎖国論」と題したことから「鎖国」という語が用いられるようになった（山川出版『詳説日本史』）。したがって、鎖国という概念はすでに過去のものであり、近世における海外との交流は日本史の中でも重要なテーマの一つになったといえる。しかしながら、「四つの出入り口」という新しい概念をもってしても、長年にわたってしみついた「鎖国」の概念の方が一般的にはまだ強いように思われる。そこで、博物館の展示物の中でも見落とされがちではあるが、取り上げ方によってはインパクトの強いと思われるものを選んで学習し、「鎖国」の概念を完全に壊してから「四つの出入り口」に関する展示物を見せたほうがよいのではないかと考えて試みたものである。

### ②使用した博物館所蔵資料

複製火縄銃

### ③準備

博物館側の事前の協力を得て、火縄銃のレプリカを用意してもらった。レプリカといっても本物に忠実に再現されており、質感は本物同様である。引き金などの細工部分も実際に作動するようになっている。導入には「おどろき感」「わくわく感」が大事で、この火縄銃を最初にもってくることにより、生徒達に相当なインパクトを与えることは間違いないであろうと考えた。せっかくなので、鉄砲に関する展示コーナーに移動して、鉄砲の構造や制作方法について説明することにした。また、導入の第2段として、展示されている「ポルトガル副王の手紙」を利用することにした。全文ポルトガル語で書かれている上、説明パネルも詳しくないため、普通はすぐに通り過ぎてしまうところだが、よく読みこんでみると「quambacudono」すなわち「関白殿」と読める箇所があり、「殿下」を意味する「V.A.」は金色で書かれている。そこで、博物館に相談し、この訳が出ている本を紹介していただいた。昔の本で文語で訳されているため、そのまま使うことはできないが、これに対する秀吉の返事も漢文で掲載されていて、大いに参考になった。ポルトガル語の辞書を購入して意味を確認しながら、この文章を現代語に変えたものを参考資料として用意した。メインとしたのは、第3展示室入り口にある『万国総図・人物図』のパネルである。『万国総図・人物図』は正保二年（1645）に長崎で印刷されたもので、当時の日本人の国際的な知識がそこに反映されていると考えた。そこには、アジア諸国やスペイン・ポルトガル・イギリス・オランダはもちろん「もすかうびや（ロシア）」「とるこ」「せるまにや（ドイツ）」「ぶらじる」「あるめにや」などが掲載されている。この時期にこれほどの世界地理に関する情報を日本人が認識していたのは正直驚きであったが、この感動を生徒達と是非共有したかった。そこで、元禄八年（1695）成立の西川如見著『華夷通商考』や『オランダ風説書』を併用し、これを事前によく知っているヨーロッパの国についての記事をピックアップし、要約して参考資料として準備した。本校では1年次に世界史Aの授業を実施するため、この時期の復習にも役立つものと考えた。そして最後に、地図のコーナーで展示されている、文化七年（1804）の『新訂万国全図』を利用することにした。この地図は地理情報が圧倒的に豊富で、この変化の背景に蘭学の存在があったことを気付かせたいと考えた。さらに、これらの地図は印刷によるもので、それが国内の各層へ広く渡っていた可能性があるというところに思いをはせることができれば大成功といえる。

### ④参加生徒

高校2年生1名 中学1年生4名



⑤展開

	学習内容	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
導 入 10 分	第2展示室「大航海時代の日本」に移動 ・「世界」に触れる。	・火縄銃に触れてみる。 ・「ポルトガル副王の手紙」を解説する。(資料1)	・火縄銃のレプリカを実際に手に取り、重量感や引き金の感触を確かめさせる。 ・「鉄砲伝来」のコーナーで火縄銃の構造について説明する。 ・手紙の現代語訳を用意するとともに、宛名の「quambacudono」に注目させ、関白の称号が世界でも通用していたことを気づかせる。
展 開 90 分	第3展示室入り口に移動 ①『万国総図・人物図』を鑑賞する。  「絵図・地図に見る近世」のコーナーに移動 ②江戸時代前期の地理書を読む。(資料2)  ③『オランダ風説書』を読む。(資料3)  ④『新訂万国全図』を鑑賞する。	・「万国総図・人物図」を見て、正保期の人々が世界をどう認識していたかを考える。  ・1695年成立の西川如見『華夷通商考』の一部を読み、この時代のヨーロッパに関する国々の知識がどれくらいだったのかを考える。  ・オランダからもたらされた世界の情報がどの程度であったか学習する。  ・1810年に完成した『新訂万国全図』を見て、これまで見てきた地理情報と比較する。	・「人物図」からポルトガル人・イギリス人・オランダ人・フランス人・スペイン人を探させる。 ・「人物図」には東南アジア各地の人々やトルコ人・ペルシア人、ロシア人、北米やブラジルの先住民が描かれていることを指摘する。 ・「万国総図」に記入された地名を、現在の世界地図と対比させる。 ・「万国総図・人物図」は印刷によるものであることを指摘し、江戸時代の初めから人々の間で世界地理への関心が高かった可能性があることを気づかせる。 ・『華夷通商考』の中からなじみのあるヨーロッパの国をピックアップし、要約してプリント化したものを用意し、問題形式で国名を答えさせる。 ・『オランダ風説書』からウェストファリア条約やピューリタン革命に関するものをピックアップして、要約したものをプリントにして読ませる。 ・江戸時代後期になると、世界地理の情報が急速に豊富になったことに気づかせる。 ・地理情報が豊富になった背景に、蘭学が盛んになったことに気づかせる。
ま と め 20 分	「国際社会の中の近世日本」のコーナーに移動	・四つの出入り口(長崎口・対馬口・薩摩口・松前口)について学習する。	・展示物を通じて一般の人々も外国とつながりを持つ機会があったことを気づかせる。

## ワークシートの設問

- ①鉄砲の構造や制作方法についてまとめてみよう。
- ②「ポルトガル副王の手紙」は豊臣秀吉に宛てられたものです。「秀吉」のことを示す語を手紙の中から探し、抜き出してみよう。
- ③「万国総図・人物図」で描かれた人や国にはどんなものがありましたか、メモしておきましょう。
- ④別紙の設問に答えなさい。(省略)
- ⑤『新訂万国全図』で見つけた地名をメモしておきましょう。
- ⑥「四つの出入り口」とは何ですか。
- ⑦「四つの出入り口」について、それぞれまとめましょう。

## 第7回「時代で変わる『学び』」

### ①ねらい

明治維新に始まった様々な改革は、封建的な身分制度を解消するに至った。福沢諭吉の『学問のすゝめ』がベストセラーになったように、志を立て、身を立てて出世することが当時の人々の人生の目標となった。このような立身出世の入り口になったのが学校である。学問を修めれば明るい未来が約束されていたこともあり、若者たちは競うように上級の学校へ進んでいった。日本は近代国家の成長段階であり、個人の立身出世は国家の発展と結びついて、学問を国家が積極的に奨励した時代であった。一方、今の若者はどうであろうか。優秀な成績を修めて、世間の評価の高い大学に進学し、安定した企業に入社できたとしても、十年、二十年先はまったく予想できない。自己責任が声高に叫ばれる今のような時代では、高い志を持つ若者を、地域をあげて応援しようという気運が高まるとは考えられない。これからの時代に、一体学問はどんな意味があるといえるだろうか。その点、明治の若者が学問に向かう姿勢はまぶしいくらい希望に満ちあふれたものである。歴博の第5展示室には開国に関するもの、自由民権運動に関するもの、産業の近代化に関するものなど、取り上げれば色々な授業が可能であるが、今回は生徒にとって身近な教育に関する展示にこだわることで、学ぶとは何だろう、生徒達がそんなことを考えるきっかけとならないだろうか、と思い、このテーマを設定した。

### ②使用した博物館所蔵資料

「開化出世寿語呂久」、「新案明治婦人双六」、「教育勅語雙六」

### ③準備

省略

### ④参加生徒

高校生2名 中学生2名

⑤展開

程 過	学 習 内 容	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
導 入 10 分	・「立身出世」「立志」とは何か	・「開化出世寿語呂久」、「新案明治婦人双六」を体験してみる。	・明治時代において、人生の価値は「出世」にあり、その第一歩が学校に通い、「志を立てる」ことにあったことに気づかせる。
展 開 90 分	①学校は誰が建てたのか  ②教育勅語の役割について考える。  ③明治の運動会  ④明治の唱歌	・山梨県の「藤村式洋風校舎」について学習する。  ・学校のあらゆる学習活動で教育勅語が登場する理由を考えてみる。  ・当時の運動会の種目を展示から調べる。  ・「ちょうちょ」を題材に、学校に西洋の音楽がどのように取り入れられたか学習する。(資料1の歌詞を見せて「これはある有名な歌の2番の歌詞です。何でしょう」と発問し、裏にある別の歌詞をヒントに考えさせる。	・山梨県では県令藤村紫郎が洋風校舎の建設を奨励したことを説明する。 ・建設費用は、学区となる村単位で住民の寄付などにより捻出されたことを説明する。 ・教科書、唱歌、テスト、授業プリント、少年雑誌といったあらゆる場面で教育勅語が登場していたことを説明する。 ・教育勅語の口語訳や「教育勅語雙六」で内容を理解させる。 ・教育勅語の内容から、個人の「立身出世」が国家の発展につながると考えられていたことに気づかせる。 ・展示パネルにある旗取、囊脚、鞠運び、擬戦運動、色合せ、担架、折紙、載囊、鞠投げ、堤燈持などがどんな競技か考えさせる。 ・垂鈴、棍棒、球竿の用途について説明する。 ・「ちょうちょ」はドイツ人の曲に日本の歌詞をあてはめた唱歌であることを説明する。 ・同様な例として「蛍の光」をあげる。 ・欧米の音楽を学ぶために、メロディーを外国から直輸入し、日本語の歌詞をあてて音楽の教材にしたことに気づかせる。
まとめ 20 分		・自分たちはなぜ学ぶのか、考える。	・学びの状況は時代によって変化することに気づかせる。 ・自分の志は何か考えさせる。

(資料1)

表

おきよ、おきよ、ねぐらのすずめ  
朝日のひかりのさしこぬさきに  
ねぐらをいでて、こずえにとまり  
遊べよすずめ、歌えよすずめ  
この歌は何でしょう？  
(ヒントはこの裏に)

裏

ちょうちょ、とまれ  
菜の葉にとまれ  
菜の葉の繁れる楽しき野辺に  
友うちつれて、袖をばかざれ  
遊べよ、ちょうちょ  
とまれよ、ちょうちょ



## ワークシートの設問

- ①明治時代の学校はどのようにして建てられたのか、まとめてみよう。
- ②教育勅語は学校のなかでどのように扱われたか、まとめてみよう。
- ③当時の運動会の種目をまとめてみよう。
- ④自分は何のために勉強するのか、考えてみよう。

### 3. 今後の課題

1年間にわたり、歴博での校外学習に取り組んできたが、実験的なことでもあり、改善しなくてはならない点が多くある。ここで、生徒の反応を示しておく。

火縄銃の構造のこまかさにおどろいた。長篠の戦の勝利もこれならおかしくないと思った。その時代の世界地図もけっこう正確だったが、銀島金島や小人の国、きよじんの国という今にはない、いろいろな伝説の島・国があったことに外国と交流していることができていた。鎖国をしていても当時の日本人はその国のことを知りたがっていたし、その人たちも日本のことを知りたがっていたことがわかった。(中1)

まず、いままで江戸時代は鎖国をしていたとはいえ、8代将軍吉宗のときに、洋書(キリスト教に関係ないもの)が多少ゆるめられたのは少しだけしっていましたが、ここまで日本人が海外に関してくわしいことまで知りたいくらい興味をもっていたのはおどろきました。他にもインド総とくから秀吉あてに、キリスト教をひなんしていた秀吉に対して、「キリスト教の信者を大量のほうびをあたえて、大切してくださってありがとうございます」なんという手紙を送っていたことから、いかにインドが秀吉のきげんをとるためにうそをついてまで、キリスト教を必死になって守っていたかも理解することができます。(中1)

火縄銃は見た目以上に重く、また、数々の鉄をまいて作ることがわかり、早合というのが簡易つめ替えの物だというのには驚きました。きっと、「口火を切る」という言葉もこの鉄砲から来ているじゃないかと僕は思いました。また、ポルトガル王の手紙の裏側にはとても、策略がはりめぐらされていて考えさせられました。万国総図や人物図では、色々な国の人々が描いてあり、どれも皆、特徴などがはっきりつかめていてとても驚き、また、総図も年が経つにつれ、大陸などがはっきりしてきていて、日本の外国への関心がうかがえました。やはり、鎖国といわれても、他の国に関心はあったんじゃないか、逆に言うと鎖国と言われているからこそ他国の動行(ママ)を知る必要があったんじゃないかと思えます。(高2)

一見すると反応としてはいいように見えるが、説明したことのおうむ返しであり、事実の誤認も見られる。ワークシートの設問をやさしくしながら、目標とするところへ導こうとしたが、生徒達の理解は表面的にとどまっていたと考える。導入部分に工夫をして、生徒達が自発的に考えて意見を言えるようにしていきたい。やはり、教師が予測できないような発見が生徒側から出てくるのが理想である。そこで、第6回を例に計画の改良案を示しておきたい。

程 過	学習内容	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
導 入 10 分	第2展示室「大航海時代の日本」に移動  ・「世界」に触れる。	・火縄銃に触れてみる。  ・『マリア十五玄義図』を觀賞する。  ・日本語になったポルトガル語を確認する。	・火縄銃のレプリカを実際に手に取り、重量感や引き金の感触を確かめさせる。 ・「鉄砲伝来」のコーナーで火縄銃の構造について説明する。 ・『玄義図』の中にフランシスコ＝ザビエルが描かれていることに気づかせる。 ・身近な言葉にポルトガル語を語源とするものがあることに気づかせる。
展 開 90 分	第3展示室入り口に移動 ①『万国総図・人物図』を鑑賞する。  『絵図・地図に見る近世』のコーナーに移動 ②『新訂万国全図』を鑑賞する。	・「万国総図・人物図」を見て、正保期の人々が世界をどう認識していたかを考える。  ・1810年に完成した『新訂万国全図』を見て、これまで見てきた地理情報と比較する。	・「人物図」からポルトガル人・イギリス人・オランダ人・フランス人・スペイン人を探させる。 ・「人物図」には東南アジア各地の人々やトルコ人・ペルシア人、ロシア人、北米やブラジルの先住民が描かれていることを指摘する。 ・「万国総図」に記入された地名を、現在の世界地図と対比させる。 ・「万国総図・人物図」は印刷によるものであることを指摘し、江戸時代の初めから人々の間で世界地理への関心が高かった可能性があることに気づかせる。 ・江戸時代後期になると、世界地理の情報が急速に豊富になったことに気づかせる。 ・地理情報が豊富になった背景に、蘭学が盛んになったことに気づかせる。
ま と め 20 分	『国際社会の中の近世日本』のコーナーに移動	・四つの出入り口（長崎口・対馬口・薩摩口・松前口）について学習する。	・展示物を通じて一般の人々も外国とつながりを持つ機会があったことに気づかせる。

全ての回を通じて参加人数が少なく、参加者が固定していたことが残念であった。参加した生徒には周囲への呼びかけを依頼し、全校放送での広報を心がけたが、大きな広がりにはならなかった。しかし、地道な活動が大きくなると信じている。ワークシートに改良を加えながら、今後も継続していくことが大事であると考えている。また、他の展示物について筆者自身が学習を深め、常にリニューアルしていくことも必要であると考えている。